



# 無政府主義者

は斯く答ふ

岩佐作太郎 著

労働運動社

會て、大杉がジョウヂ・バレットの『オアゼクシオン・オブ・アナキズム』を示し、『之れを種本にして日本人向きに書きなをして見ないか』と云つた。『よし、やつて見やう』と受合つた。

それが大杉が逝いてから彼れ是れ二年半後に漸く、勞働運動に連載した。こんなにはつてをくつもりはないのであつたが、月日の方が容赦なくたつて了つたのだ。

ジョウヂ・バレットは二十四箇の問題に答へて居る。僕はそれを十一箇にした。可成分り安く、日本人向に書くに骨折つたつもりだ。が、それは、それ、腕の問題で、僕の企て及ぶ所でない。それを今度パンフレットにした譯けた。澤山削られたがそれは已を得ぬ。

昭和二年五月

岩佐作太郎

# 無政府主義者は斯く答ふ

## ■無政府主義と所謂無政府状態

世間では、無政府と云ふことは、政府がありながら其の威令が地に落ちて全く行はれないで、其の法律と秩序とは蹂躪され、政府あつてなきが如く、社會は紛糾、混亂し、人倫五常の道のすたれた状態に陥つたことを云ふて居る。

何所其所は内亂のため今や無政府状態に陥つて居るとか、又はトラストやシンケートが横暴を極め經濟界は無政府状態を現はしてゐると云ふが如きはそれである。其故に無政府主義と云ふときは、勢ひ、混亂状態を連想せしめ、組織もなく、秩序もない、我儘勝手放題な亂暴狼藉至らざるなき世の中を想像せしめ、斯

る世の中を出現せしめんとするものだと言解され、誤解され、早や呑み込みされて居る。

けれども、無政府主義はそんなものでない。そこには組織もあれば秩序もある人々足り、家々給し、人倫五常の道は正しく行はれ、秩序はありあまる程で、假令、其所に裁判所ありとするも係争事實なく、警察ありとするも取締るべき事故のない社會、換言すれば法律と強権の必要のない社會、即ち政府のいらぬ、無政府の社會を建設しやうと云ふのだ。

## ■社會組織の建て直し

人間は社會組織の悪いために悪化されて居る。人間を社會組織の悪いために悪化させてはならぬ。人間を悪化するが如き社會は之れを變革し、人間を善化する所の社會組織に建て直さなくてはならない。然らざれば斯る民族若しくは國民は

遂に滅亡せざるを得ない。

社會は人間以前からあつた。社會は人間よりも先在者である。人間にならない以前から、永い永い間社會を爲して生活して來た。人間は、實に社會的動物である。社會に生れ、社會に死ぬる動物である。共同して生活し、共同して働くのは人間の本能である。彼等は斯くすることに依りてより善き生活を享樂し、進化發展を爲すことが出來た。

それ故に、人間は其の社會性に何等の拘束を受くることなしに、自由に其の生活を享樂し得ることに依りて無限に進化發展することが出來、この社會性が拘束され、其の生活が行き詰ることに依りて滅亡する。

人間社會は所有する者と所有せざる者、搾取する者と搾取される者とが生じ、支配する者と支配される者との階級が生れ、其關係を維持し永續させるために法律が出來、宗教道德が生れ、強權が生じた。斯くして其所に、人間の社會性は拘

束を受け、壓迫されることとなつた。そして其の拘束、其の壓迫が益々濃厚に愈々嚴酷になり、煩雜を極むるに及んで、人間生活は行詰り、益々惡化され、遂には滅亡するに至る。之れ歴史の語る所である。彼のギリシヤ、ローマンの亡んだのは、野蠻人の爲めに亡ぼされたものでは決してなく、この拘束、この壓迫のためであつた。日本民族が絶海の孤島に閉居して遂に大陸に發展し得ざりし所以もその爲めである。

然も、この拘束、この壓迫の來るや、其の初めは何時も地藏顔である。人間の社會性を啓發し、善導するものなるが如く装ひ、若しくは舊拘束、舊壓迫から解放するが如き顔付をするけれども一度び人間社會に喰ひ入るや、皮から肉、肉から骨と喰ひ盡さねば止まぬ妖魔である。

それ故に、無政府主義者はこの人間社會を喰ひ滅す妖魔である法律と強權、宗教と道德とを根本的に絶滅することを期し、人間社會を根本から洗滌することを

欲する。斯くするために無政府主義者はこの妖魔の據りて以て棲息する所の、所有する者と所有せざる者、搾取する者と搾取さるゝ者、支配する者と支配さるゝ者との階級的存在を絶対的に廃絶して、人間を悪化し奴隸化する所の社会組織を徹底的に変革し、人間を自由平等の天地に解放し、以て其社会性を無限に進化發展せしめんとする。

されば、無政府主義者の運動は宗教運動若しくは道徳運動ではなく、將た又政治運動では勿論ない。全然經濟運動であつて、改良的でなく革命的である。そして彼等は教育に依りて、自由協會の組織に依りて、政治的、經濟的專制者に對する個人的及び協同的反抗に依りて其の目的の達成を期待する。

#### 無政府主義に對する反對

斯様に無政府主義は革命的運動である。この世に於ける不正、不義、不公なる

有らゆる組織を排除し、絶滅することを期するが故に筆に口に讒謗と誤評とを受け、暴力に依る迫害壓制を蒙る。そして多數の反對と質問に遭遇する。誹謗と迫害とは之れを爲すもの、勝手である。以下少しく反對と質問に對して無政府主義者は如何なる答えを與へて居るかを検討しやう。

- 一 有ゆる變遷は進歩に依りて徐々に行はれ、無政府主義者の革命に依りて行はんと欲するものは急激なものではない。

大變革は何れも皆な殆ど見へない進化の過程に依りて、徐々に準備されることは全く眞實である。變化は往々この遅々たる過程で終始することもあるが、他方に於て屢々徐かに進化が頓點まで進んで、其時に至つて突変が行はれることも全く明かである。殆ど到る處で自然物について吾々は二重の過程を見ることが出来る。徐々に、眞に徐々に、新生命の萌芽の熟する所の植物が、全く突然に新状態

を露はし、それから再び徐かに變化を始める。

數多きものの中で、殆んど笑止のやうなこれが好適例は、ビイロ・ボラスと呼ぶ細菌である。他の普通の植物のやうに甚だ徐かに無邪氣に芽胞を熟させたこの植物は、時節が到来すると、突然水を噴出する。其の水の中に芽胞が運ばれて居る。そして植物そのものは甚だ細小なものであるけれども、時として三尺もの隔たりにそれを蒔き散らすのである。この場合には必要な壓力が徐々に滲透したもののなることは全く事實である。有ゆる條件が氣付かぬ程に熟するには長時間を費して、壓力が増加するに及んで其の細胞壁を脱却したのであつた。時節は胞壁が之れ以上に擴がる事が出来なくなつた時に來たのだ。——そして其の時に爆發したもので、生命の新萌芽は其の新らしい状態に急激になげ出されたのであつて、其の新状態に従つて其等は成長するのである。

社會の諸状態もそんな風である。何時でも民衆の中に徐々に自由の精神が發達しつゝあつて、專制はこの發達のために席を讓るために、徐々に尻込み若しくは退却しつゝあるのだ。だが内部に發達しつゝある所の自由の声に応じて、政府或は專制的部分が広がるだけの充分なる弾力を有たない時節が到来する。この点が新發展の切迫した時に、それを拘束する所の桎梏を破壊する。そして革命が行はれる。

實際上新生命が生れやうとする場合には、社會の根本的の改革は必ずや提案される。それは其の社會の支配的要素の全寂滅を意味せずには行はれ得べきものではない。斯かる提案の支配的要素から歓迎さるべき筈がなく、又平穩に受け入れらるべきものでもない。彼等は必ず壓迫に壓迫を加へ、抑壓に抑壓を以てするに違ひない。事實上斯る場合には彼等は最も悍惡なる暴行を敢てすることを例とする。

この故に無政府主義者は斯る改革は急激に行はるゝもので、進化の理法に依る

徐々たる進化でなく激変である。即ち、革命である。

立法權は愚、行政、司法は勿論、兵馬の大權まで持つて居た恐ろしいフランスの大革命議會は一七九五年に破滅し、儼乎として光彩を放ちつゝあつた共和は消え失せ、稱廢を極めた執政々治の後にフランスはボナパルトの武人政治の下に落ち、暴露の專制を打登したロシア革命は幾何もなくしてレーニンの專制治下に落ちたのを見て、『國民は專制主義を登して再び專制主義に退却するものならば、革命なるもの果して何んの仙値がある』と、革命に対する陳腐極まる反対論が屢々行はれる。けれども之れ等は、革命を見るの明を欠いて居る臆病な保守主義者の言であつて、取るに足らぬものである。

一度び革命が開始するならば、もし、それが一時的であつたとしても、その格段なる騒動に於て、一般人心にある社會狀態を與へる所の其の最後の結論、換言すれば、人類が到達することの出來得べき最高の點まで、必然的に發展せねばなら

ぬのである。この最高の發展は反動の爲めに維持することが出來ないとするも、必ずや之れを次代に遺贈し若しくは他民族に贈與する。

革命の仙値は單にそれに依りて取得したるもの、及びそれに就て留保したるものに限らるべきものでなく實にそれに依りて遺贈され、贈與されたる主義の上に存在する。改良は何時も過去との妥協であるが、革命に依りて行はれたものは未來の進歩を約束する。斯の如きが之れ歴史の吾人に語る所である。

## 二 人類の歴史は階級闘争の歴史である。然るに無政府主義者は、革命

命を以つて階級戦でないと云ふのは怪しからぬ。

成程、人類の歴史には階級闘争がある。無政府主義者はそれを否定しない。けれども、それは歴史の全體でない。それは本質的には保守的運動であつて、過去への妥協若しくは追及である。それは改良運動であつて、全人類の解放を意味し



ない。従つて未來の進化發展を約束しない。

然るに革命は全人類の解放を目的とするもので、保守的改良運動ではなく、過去との妥協ではない。それは未來の進化發展を約束するものである。

會つて、明治維新前のこと、某所に多數の青年志士が集まつた。談會々彼等の抱負を披瀝するに及び、某は十萬石侯、某々は二十萬石侯と、口々に評し合ひ、但し吉田寅次郎に至つては三千石を越ゆべからずと、相見て苦笑した。それを立ち聞きした吉田寅次郎は愕然色をなしたとのことだ。

彼れ吉田は、今は松蔭神社として神に祀られ、我國に於ける志士の典型とされて居る男である。青年志士達は當時に於ける仲ぶることの出来ない下層階級に屬する人々であつた。彼等は、實に、新に、興りつゝあつたブルジョア階級を基礎とし、若しくは踏臺として、自分達の支配を打ち建てんとした熱烈なる權勢の追及者、階級闘争に於ける盲目なる闘士であつたのだ。従つて彼等は四海同胞 萬

民平等の大義のために闘つた革命の戦士ではなかつた。

それ故に、彼等にして一度び志を得て、彼等の天下を組織するや、其の朝にあると、將た野に在るとを問はず、只管自己の立身出世を心掛け、若しくは自己階級の樹立に腐心し、そのためには血もなく涙もなく、權謀術數を弄んで至らざるなきものであつた。

斯くして上下風をなし、日本民族の良風美俗は廢頽し、道義地に墮ち、人々相食ひ、相殺し、相偽き、相陥擠し、食料、衣類山積されて居て、道に餓孚横はり帝都の眞中に凍死するものさへ生じ、高臺高樓林立して居りながら、住むに家なきもの數知れず、青年男女にして生活の自由、戀愛の自由を奪はれて、徒らに老ひ、徒らに亡び行くもの、擧げて數ふべからざる有様である。

然も、勝てる者、富める者は、意氣揚々として夜となく晝となく、毒瓦斯を播き散らし、泥土を人々に打かけながら、乘廻してゐる。彼等の城壁は年々歳々其



の高さを加へ、彼等を守る軍隊と警察とは益々其精銳を増し、飽くなき彼等の慾を満す為めの法網は益々巧妙を極め、加ふるに道德を以てし、宗教を以てして居る。

之れでは如何な日本民族も行詰らざるを得ぬ。このまゝに放任して、一大変革を行ふことがないならば、日本民族の前途や知るべきのみ。

嗚呼、これ明治維新の當然の歸結であつた。それが革命でなくして階級闘争であつたためであつた。私達もあのやうになりたい、そして私達の支配、私達の搾取を樹立したい、との過去への追及と妥協である改良運動であつて、萬民を解放して未来の進化、發展を約束する革命運動でなかつたからだ。

だが、之れは獨り日本のみのことではない。世界到る處皆然らざるなき有様である。今や人間の尊貴は何處にも之れを求むることが出来ない。之れ實に、世界の志士、仁人、義士が奮ひ起つて、社会大變革を絶叫して止まぬ所以である。

無政府主義者の運動は他の志士仁人義士の運動と異り、宗教運動若しくは道德運動ではなく、將た又政治運動でもない。換言すれば、階級闘争保守的改良運動でなくして、人類本然の社會性を束縛し、戕賊する所の資本主義的搾取制度——換言すれば国家制度——を徹底的に破壊し、人間本然の社會性を解放せんとする革命運動、經濟的運動である。

饑たる者にパンである。寒さに泣く者には衣類である。住むに家なき者には家を以てせねばならぬ。人類の墮落、社会の災禍の原因である資本主義搾取制度を徹底的に破壊し、人間の社會性を解放し得る運動に非ずして、資本主義と妥協し、協調し、若しくはそれを相続せんとする保守的改良運動、宗教や道德、政治や、社会主義運動などの能く人類の墮落、社会の災禍を救済し得る所以のものではない。之れ我等の堅く信ずる所である。

若き革命家等は能く言ふ。斯くも虐げられ、斯くも窮乏、悲惨な生活に泣きな

から、何故に目を醒まさぬのであらうか。之れ畢竟、虐げられ方が未だ足らぬのだ、もつと苦しみ、もつと悲惨な生活に陥らねばならぬのだらう、と。

けれども、社会革命は決して失望の結果ではない。それは未来社会の組織に對する光明を認むることに於て行はるゝものである。

永い間虐げられ、永い間苦しい悲惨な生活をして居つたので、人間は因襲に囚はれた、寸前黑暗になり、怯懦になり、因循姑息な生活を送つて居るのだ。若し夫人が來たりて、彼等の姿を彼等自身に見せたならば、吃驚仰天せざるものは蓋し稀であらう。彼等に社会革命の責任あり、若しくは、力があると云ふならば、彼等は却つて、層一層彼等を窮地に陥罪する悪魔として戰慄するに違ひない。之れ彼等が往々社会革命を嫌忌し、屢々、志士仁人義士を虐遇し、殺戮する等の挙に出る所以である。

社会革命の事業は、彼の所謂科學的社會主義者の唱ふる如く、労働階級の必然の事業では斷じてなく、幾多無名の志士仁人義士の獻身犠牲の事業なる所以だ。彼等の行動、彼等の努力とに依りて、人民の頭腦中に未来社会の光明が明らかに植ゑ付けられ、茲に初めて民人をして起たしめることとなるのだ。

資本主義制度の勃興に伴ふて、其の掠奪搾取を助長し完成せしむるところの大産業大企業下に働く新しい労働者階級が出現した。彼等は其の自ら占むる地位からして組合を作り、團結して階級戦を行ひ、以て彼等自らの地位を向上せしめ境遇の改善を圖ることが出来る。そして彼等の數の増大するに従つて益々其の勢力を加へて來る。

是に於て、權勢に飢へたる人々は、この勢力を基礎として、若しくは踏臺として、自分達の支配、自分達の搾取を樹立しやうと血眼になつて活動して居る。

彼等はこの新に興りつゝある労働者が、猶ほ、労働者であり、無産者である所からして、その勢力に據る支配及び搾取を名けて無産階級獨裁、若しくは労働者

階級獨裁と稱してゐる。恰も、原敬や若槻禮二郎輩が爵位なき故に平民宰相なりともてはやされてゐるやうに、この階級の闘争、この階級の勝利を以て、無産階級、勞働者階級の勝利、若しくは闘争と稱してゐる。

けれども、この階級は元々之れ資本主義の掠奪、搾取を助長し、完成せしむるために出現した新興階級であるから、其の本質上、資本家階級と共に資本主義部落を構成するものなることは、尙ほ警察官吏が其の階級の地位から言へば勞働者であり、無産者でありながら、僥として政府の一部を構成するものなる同一論りに當るべく、聊か極端ではあるが、彼の山寨に立て籠れる山賊の親分と兒分との關係にも似て居る。兒分達は組合を作つて親分に對し階級戦を起し、自分達の地位の向上、生活の改善をなすことが出来る。加之、進んで親分を倒し、之れに代ることも出来る。けれども彼等は依然として山賊たるに代りはない。

されば、彼等の運動、即ち階級闘争は、資本主義制度の掠奪、搾取の根本に觸るゝものでなく、本質的には資本主義に協調し、妥協し、若しくは其掠奪搾取を相續する保守的改良運動である。之れに依りて萬人が解放されるものではない。彼等の闘争、彼等の勝利を以て、全無産階級、全勞働者階級の闘争、若しくは勝利と云ふが如きは、まことに笑止の至りと云はねばならぬ。

人情は常に弱者に味方する。殊に我れ自らが同じく弱者たる時には更にそうである。そして又人事は一切皆切が革命運動で終始せねばならぬ筈のものでない。けれどもそれがあるがために事物の見方を誤つてはならぬ。

それ上述のやうに、この新なる階級は、其の占むる地位からして、勞働運動を興して階級闘争を爲して居る。この階級闘争は自己階級の地位の向上、境遇の改善が目的であつて、本質的には革命運動たり得るものでない。之が極端に發達したとするも前の搾取に取りて代り、自分達の支配、自分達の搾取を樹立するに過ぎないのだ。

若し夫れ、此の運動にして革命運動と変化し、資本主義制度の搾取掠奪に対し、根本的の斧鉞を加ふるやうなことがありとすれば、それは彼等の階級的運動を超越して、全人類の幸福、安全、自由のために、在來からの勞働階級、無産階級たる大衆の運動と合一した場合だ。

之れ無政府主義者の革命は階級闘争運動を超越すると爲す所以である。

### 三 法律と議會とは現支配階級に依りて、彼等の目的を達成するため

に用ひられた。我々は何故に我々の目的を達成するために、それを用ゆることが出来ないか。

この問題は資本主義と勞働者の運動とが、本質的にその目的が相反するものなる事を考慮せないことから起る誤謬に基いて居る。若し兩者の目的が同一のものであるならば、同一機関、同一法律が役立つこともあらう。然るに資本家は益々